

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別優待承認雜誌第三五二号）
昭和三十四年九月二十五日印刷 昭和三十四年十月一日發行

第二十五卷

第十号



十月号



新刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円七角八分

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円七角八分

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやみとまよいのもと
4. すでに教われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土 十月号 目次

表紙・扉絵

さし絵・カット

結城天童

加藤金一

天台大師と法然上人……………林 隆碩(6)

よろこびの中よろこび……………戸松学瑛(2)

仏教にかみつ……………山田 登(23)

善人なお生る……………仁戸田六三郎(18)

実話夢の中のお念仏……………樋口亮栄(11)

高僧伝 神谷大周……………大橋俊雄(14)

創作 三浦一族の最後……………鶴田湛泉(26)

法然上人の感化……………(5)

浄土歌壇……………岩野喜久代(22)

釈尊の生涯……………佐藤密雄(16)

扉の御法語……………仏教ものしり帖……………(39)

童心仏心……………(25) 会員だより……………(40)

真理の花たば……………佐藤良智(36)

―若き女性への仏教入門(七)―

浄土

十月号

たとへばおもき石をふねにのせつれば、しづむ事なく、万里のうみをわたるがごとし。罪業のおもき事は石のごとくなれども、本願のふねにのりぬれば、生死のうみにしづむ事なく、かならず往生する也。ゆめくわが身の罪業によりて、本願の不思議をうたがはせ給うべからず。これを他力の往生とは申也。

法然上人御法語





よろこびの中の よろこび

―十夜会によせて―

戸 松 学 瑛

ご本尊、阿弥陀さまは、慈悲の尊容にまします。尊いかな、み胸を開いていらせられる。いつでも、どこでも、だれでもの悩み煩らい、憂き、つらさを聞きとり、領納して下さる御姿と拝し奉るは、無理でありましょうか。人間お互同志の間柄で、心の丈を打ち明けることを胸襟を開らくと言いますが忝けなくも、ご本尊さまは私たちの四苦八苦の胸の内を、残さず余さずお聴き取り下さる御容子、如何にも有りがたいことと存じます。

思えばお互人間は八万四千否八億四千と限りない煩惱妄念

にさいなまれながら六道流転の長い旅を続けて居る身の上であります。そのくせ、人間は、死んでも命のあるようにと、無理な願望を心のどこかに持ちながら而もお先ま、つく、らで暮して居る。どうせ浮世は太く、短かく、面白、おかしくと、すて、ば、ちを言う人でも命は惜しい、ほしい、千万年も生きたいと思うは人情で之を否定することは出来ずまい。蓋し生きたいとは生物の本能であるからであります。この本能に応同するもの、それが即ち往生の事実であります。云うところの往生とは死ぬことに非ずして生きることなりとは釈尊のみ

教えてあります。

☆

ご本尊と仰ぎ奉る阿弥陀さまのみ胸、救済のお目当ては、一切衆生のため、とりわけ、凡夫、愚かな、罪とがの多い私たちのために外なりません。「われ浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを示さんがため」と宗祖法然上人は、立教開宗の御思召を、かく仰せられて居ります。さすれば阿弥陀さまの御本心はすべて衆生のため、衆生可愛やに尽きて居ると申上げても言い過ぎでなく、その、み声、その御力は、長載永劫、永の御苦勞を、たたみ込まれた御本願の力となって、凡夫、私たちの身に、降り注がれて居ると申し上げてても差支ありますまい。

然し力なき私たち凡夫の分際ゆえ、阿弥陀さまのお慈悲が、ご本心が、ご本願が、いわゆる高嶺の花であってはなりません。そこで南無阿弥陀仏のお念仏が登場するのではありますまいか。

力のない私たち愚かな凡夫には特別な智慧才覚も力もありません。そこで凡夫に出来得る修行の道は、浄土他力のお念仏―助け給え阿弥陀さまと、何の思慮分別もなく、心の底から一心にお呼び申すより外に何の手段も方法もございません。

それ故お釈迦さまは経に、「光明遍く十方の世界を照らし、

念仏の衆生を撰取して捨てたまわず」、と仰せられ、又唐の高祖善導大師は、「衆生称念すれば必ず往生を得」と、お勧めなさいました。

わが宗祖法然上人は

▽十方に浄土多けれど西方を願うは、十惡五逆の衆生の生るる故なり。

▽諸仏の中に弥陀に皈し奉るは三念五念に至るまで自ら来迎したもう故なり。

▽諸行の中に念仏を用ゆるは彼の仏の本願なる故なり。

▽今弥陀の本願に乗じて往生しなんに、願として乗ぜずと云うことなし。

と断定されました。

要するに、凡夫救済の極善最上の良法は、阿弥陀さまの本願のお念仏を申すに如くはないと確信いたすべきであります。

☆

救わせ給う阿弥陀さまと、本願念仏を實踐する私たち凡夫との間には、不可分の尊い関係が結ばれて現世も後世も

いつも御一しょ、切っても切れぬ（親縁）

どこどこまでも引き立てられ（近縁）

末は蓮華の上までも（増上縁）

この三縁の縁結びも固く、善男子、善女人の未来は永遠に仕合せを約束されて居ります。

「この度は西方の弥陀がわれを迎えたまう。ありがたや念仏の花を土産に往くぞうれしき」と自分の墓に刻みつけ平生三万、臨終千返の日課怠らず、文政十年二月廿九日大往生を遂げた江戸の住人常陸や重左衛門の喜びの有様も偲ばれるではありませんか。

☆

阿弥陀さま、ご本願の力によればこそ、念仏する者、皆往生を得る、この広大な御恩徳を有りがたく思うにつけ報恩感謝の誠を捧げること、これが十夜法要を、つとめる意義とも申したい。

今は昔、白河天皇の御宇、京の都の真如堂に祈誓をこめて阿弥陀さまの御恩顧に感泣した伊勢ノ守、定経の舎弟、貞国が十日十夜の念仏会を執り行い、降って明応四年、鎌倉光明寺第八代観誓祐崇上人が、勅召により宮中にて講経、次で紫宸殿にて十夜の法要を修し。更に勅許により十夜法要式を光明寺に移し修行してより今日に至るまで諸国、諸山に行われ、

世にも有りがたい法要となった由、伝えられます。

この尊いお十夜法要も、時と処と人情とによって、それぞれの地方色を交えて今現に

▽鎌倉光明寺―双盤十夜

大会中、引声弥陀経、引声念仏修行

▽八王子大善寺―諷誦文の十夜

▽鴻の巣勝願寺―塔婆十夜

それぞれに由緒あり、来歴あり、色とりどりの特色あって毎歳、眠かに法儀が執り行われて居ります。誠に随喜の至りと申し上げたい。

古句に散見するお十夜の風景、一、二

十夜とてかしこき法の教かな

十方十夜み仏の前去りがたき

若人や親十代の十夜講

（浄土宗教学部長）

×

×

×

×

遊女化益

文治元年三月二十四日、平氏一門は彦島沖の壇の浦に亡び、その関係の多くの婦人は四散し、帰えるところがなくなつたのである。生活の困きゅうは云うにしのびないものがあつた。

今日と雖も戦禍の及ぶところ同様の現象を見る。まして昔のことである殊に勝にのつた鎌倉幕府では、文治元年十一月二十九日、全国に守護地頭を設置してからは、彼ら残党狩りはきびしくその再興を根本的に防いだのであつた。

生きる為や、やけになつて遊女となつたろうものも尠くない。

室の津港の遊女「友君」の如きはその一人であつたろう、世にある時は、旭將軍と云われた木曾義仲の側室の一人山吹御前と云われた方の、世をしのぶ姿であつたのである。

遊女なればとて人間である。来世の幸福をねがわぬ筈はない、又往生を求めない者はない。

信仰を欲したとしても、伝道する人が見当らない。当時までの聖道門の教えでは、先づ転女成男が条件である。仲々信仰開眼は困難と云う外はない。

この時に當つて、大師から尼聖如房への御文にあるように、

一声も、なむ阿弥陀仏と申せば、我身はたとひ、いかにすみ深くとも、仏の願力によりて、一定往生するぞとおほしめして、よくよく一すちに念仏の候べきなり。我らが往生は、ゆめゆめ我身のよきあしきにより候まじ、ひとへに仏の御力ばかりにて候べきなり。

とする信仰は、遊女達の光明となり、生き甲斐をそこに発見している。されば九卷伝詳しくは「法然上人伝記」によるなれば、承元元年三月、大師のお船が、

播磨国室の泊につき給に、小船一艘ちかづきたる、これ遊女がふねなりけり。遊女申さく「上人(大師)の御船のよし、うけたまはりて推参し侍なり。世をわたる道、まぢまぢなり。いかなるすみありてか、かかる身となり侍らん。この罪業おもき身、いかにしてか、のちの世たすかり候へき」と申ければ、上人(大師)あはれみでの給はく、「げにもさやうにて、世をわたり給らん罪障、まことにかるからされば、酬報またはかりがたし、もしかからずして、世をわたり給ぬべきはかりごとあらば、すみやかにそのわざをすて給べし。もし余のはかりごともなく、又身命をかへりみざるほどの道心、いまだおこりたまはずば、ただそのまま

にて、もはら念仏すべし。弥陀如来は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をたてたまへる事にて侍れ、ただふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ、本願を憑て念仏せば、往生うたがひあるまじき云云

と、ねんごろに教えさとしてゐる。遊女なればとて、決して卑下してはいけない、念仏する時は万人平等である。如来の本願を信じて念仏する時には、如何なる身分の者であつても往生することが出来る。如来の弘誓の船に漏れ残る筈がない。

遊女達は随喜の涙を流して感激したと伝えている。

大師の教戒が充分了解されたのである。

のちに上人(大師)の給けるは、この遊女信心堅固なり。さだめて往生を、とぐべしと、

もの語られたのであつた。大師、同年冬、摂州勝尾寺にお移りのとき、又この地に立寄つて、遊女のことを尋ねられた、遊女は、

大師の教訓をうけられてからは、この地から程遠からぬ山里に住んで、一すちに念仏申していたが、いくほどもなく臨終正念往生したと、人々申上げると、大師はしつらんしつらん(左もあろう)と仰せられたのであつた。

天台大師と法然上人



林 隆 碩

我が祖のいんとんを味識せんがために、天台大師と法然上人について述べてみたいと思います、この隠遁について、よく似たものに、捨身があります。この捨身は、捨命捨財の一つで、金光明經、捨身品に説かれてあります薩多太子の餓虎に身を供養する話であります。

この物語りは、早く西域地に其の絵の構図もでき、我が法隆寺の王虫厨子にも描かれていて世界的の名宝となつておる。其の捨身と隠遁と一脈相通ずるものがあつて混同されやすいですが、この二つは明かに區別せねばならぬ、捨身は六度のなかの布施はら蜜であり、今は単に名利からのいんとんであるから、強いて六度のなかに配当す

れば、精進波羅みつに接すべきです。この相違あるがゆえに、捨身の聖者ともうさずに隠遁の聖者と申しあげているのであります。又、その当時に流行した「遁世の形を」とし、異形を好む」の一類があつて、それによつて、社会の視聴を一身にあつめようとした「やぶにらみ」のそれ等とも簡別してみねはならぬのは今さら申すまでもありません。

前来、述べたように、我祖の隠遁は名利からのいんとんであつて仏道修行のいんとんではない「われ閑居を願ふことは、永く名利をすて、静かに仏道を修行せんがためなり……」は、これ自利門の精進であり「われ、たとい死刑に処せらるゝとも、このこ

云はずはおるべからず……」は化他門の精進であります。これ即ち、名利の虚修を絶対に排除して、仏道直修に猛進したまいし勇者にたましましたのである。これを名利為本の見地に住するとき、いんとんの大聖と申上ぐのであります。

これについて、今一つのお手本がある、それは天台大師のいんとんである。

陳の、光大元年、大師、三十歳にして、師の南岳大師の命で、法喜等の二十七人と共に、金陵の都に出て、瓦官寺に留る。それより、八ヶ年の間に於ける、大師が金陵の伝道を、所謂第一期の布教と申します。この間に、或は法華經を説き、大智度論を講し、次第禪門・六妙門を述作し、又、家兄の陳銖のために小止觀を作られた。法華大論の開講は当時の諸学者の間に歓迎せられ陳の宣帝すら自ら文武百官を將いて講席に望まれ、諸宗の学徒も亦その座に列したのである。以つて大師の布教の大成功を見るべきである。かくの如き成功は大師が学者としての成功であるが、さらに大師が禪人としても大なる名声を博せられたのである。教と禪との二面に涉りて、金陵満都の人士をして驚嘆せしめたものであつた、当

時、金陵に一大学者法朗なるものがあり、自身は親しく大師を問難はしなかったが常にその徒をつかわして大師の所説を難せしめたが、天台の無碍弁とその豊富なる学殖とは朗の徒をして遂に立つを得ざるに至らしめたのであります。かくて前後八ヶ年にわたる金陵の教化は充二分に成功を収めたのである。しかも、ある動機に由って、遂に大建七年、即ち、大師三十八歳にして、飄然、去って、天台山に隠れ玉うたのである。

祖師、天台大師にして既にしかり、ましてや源空においてをやである。これ元祖が隠遁に導かれ玉うた有力なる原因である。申すまでもなく、その宗の祖師が、その宗の未学に及ばず影響は甚大なるものがある。もし、その宗の祖師がその宗の後輩にひびきを与えないものがあつたら、その宗は滅亡の宗旨である、我が元祖の如き大士はすくなくらず天台との交渉があるべきです。

しからばどの点で天台との相関を論ずべきか。この点は古来からあまり論ぜられてないようです。ないようではあるが、必ずあつたに違いない。あつたとすれば、いかなる点においてあつたとするのか、わたくしは此の点において、随分ながいあいだ困し

たのであります。しかるに隠遁について、いささか思案を掘り下げたとき、忽然と、大関係あることに想到したのであります。伝本第一に、勢至丸が面西の僻を、天台大師の童稚の行状に例してあるが、これは自然の暗合であつて、努力の習合ではない、これ以外には行状の相関は述べられてない。さりながら、元祖のいんとんが天台大師のそれに習い玉うたと判って見れば今までに窺いえなかつた深義を見いだすものである。

「少年にして、はやく、出離の心を、おこせり、まことに、法然道理の、聖なりと随喜して、法然房と、号す」の文意は、六十、七十、八十、くらいの老僧になつて、やつと出離心を起すのが普通であるのに、御房は僅か十八歳で起すとは感心だとして法然道理の聖としてと解されてある。しかるに天台の行状を入れて考うるに、祖師天台にしても、三十八歳にしてのいんとんである。しかるに御房は十八歳で既にいんとん、廿年の相違があるが八と八と相通ずるものがあつて面白い「少年にして早く」を天台大師の所へ持つていって考えると、まことに深いものがあるので興味津々、ありがたいものがあるのであります。

かく、天台と元祖の相関に気付いてみれば、其の他にも種々の面で交渉があることが気付かれたのでありますが、それは別題のことでもありますから、ここには略します。

上来、元祖の隠遁について、必要以上に筆墨をついやしましたが、これは小生が大師の隠遁に就いて深く深く随喜するところからと、又諸君にも好いてもらいたさに多紙を費したのである。かように隠遁を解することが、認識不足かもしれぬ、又、時代錯誤かもしれぬ。必用以上の感察かもしれぬが、それにかまわず、唯だ好くがままに、種々なる角度から伺つたのであります。

なお、此の元祖の隠遁を極端化したものに時宗の一遍上人智真がある。これは祖意の本流とは断じて云えない、傍流と申すべきです。過ぎたるは及ばざるの古言がさぶる適評である。これについて論及する必用もあるが遙かに滅後の問題であるから今はこれにて策を止めます。

御先徳が、大師の徳を、智徳、行徳、戒徳、隱徳の四分類していますが、要約して我が祖の徳をまとめたものである、此四徳中、隱徳を加えたこと、御先徳の考察の至たれり尽せりに、至心随喜合掌感謝であります。

善人なお生る

——或る善人の愚痴——

仁戸田六三郎

「善人なお生る」という題を与えられて何か書かなければならないのであるが、只今は少し脱線させていただいて所感の一端を述べさせていただこう。

法然の選択集も親鸞の教行信証も、また唯円が記したと称せられる歎異抄も要するに悪人に対して重点をおいていることは周知のことである。平らたく言えば善人より悪人の方が数が多く、知能程度は悪人の方が低い。だからむづかしい説教は知能程度の高い善人にはわかるが、程度の低い悪人にはわからない。そのわからない悪人の方が数がうんと多いのだとすれば、往生出来るのは少数の善人で、大多数の悪人は出来ないことになる。仏法が善人にばかり

り理解されるとすれば、往生は善人という一部の人数にだけ可能となる。仏教は勿論すべての宗教は一人でも多くの人間を救わなければいけない。それが本当の宗教である。ところが善人だけしか済度しない宗教は本物ではないわけだ。法然も親鸞も従来の宗教を一層真実のものにしたわけで、そこに浄土三部経が選択され摂取不捨の精神を徹底させたわけだ。思えばこれこそ仏教中の仏教というべきもので誠にありがたい極みである。

「善人なおもて往生遂ぐ、いわんや悪人おや」という言葉は親鸞が言ったものとして歎異抄に出ていますが、これが親鸞自身の言葉であるかどうかは今の



ところ実証的な根拠に乏しいようだ。それはそれとして、とにかく浄土門のエスプリはこうした線が共通といえよう。悪人正機にまで行かなくとも、数に於て圧倒的に多い悪人に重点をおくことは確かに宗教の本質に触れていると思われる。

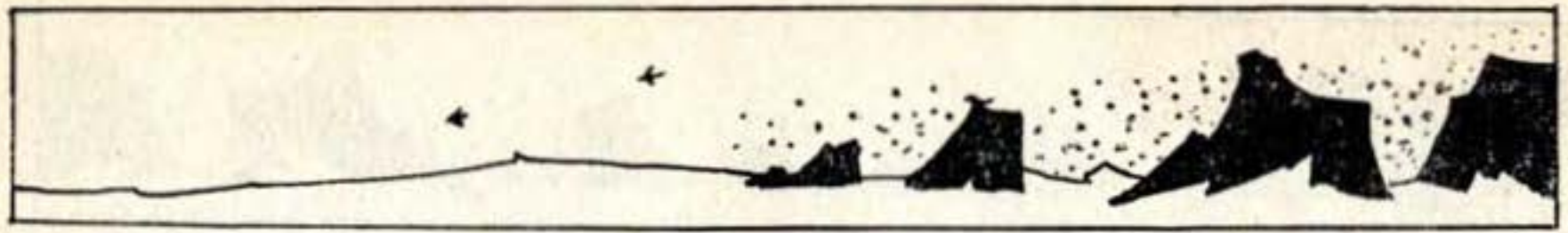
そこで現代の世相に眼を向けてみると、相も変わらず悪人の方が絶対多数である。勿論どういふ人間を善人といい、どういふ人間を悪人というかの規定が問題であろうが、少くとも道徳や法律でいふ善人悪人を含むことは当然であるが、ただそれだけではない。道徳や法律は時代によって多少の変化がある。

姦通は今法律上の罪にならないそうである。こんな調子で法律上の罪にならなければ現代では大手をふって大道を歩くことが出来る。そういう心臓の強い人間が多い点では現代は前古未曾有みたいな気がする。弥陀の大慈大悲はこのような下品下生でも済度して下さるし信心さえあれば往生出来る。

ところが現代の一隅には心臓の強い悪人に圧倒されながらも、ほそぼそと善人の域を守っている善人がいる。そういう善人は心臓が弱いし気が小さい。例えばラッシュアワーの電車に乗るのにも人を押し

のけて我先に乗るようなことは決してしない。後から来て先に乗るような奴は法律では罪にならないだろうが、決して善人ではない。かくして善人はなかなか電車に乗れなくて遅刻する。そのために課長から叱られたりする。ボーナスもへらされる。心臓の強い悪人の方が甘い汁を吸ってチャッカリ成功したり幸福になったりする。それなら自分も宗旨変えをして悪人の仲間に入ろうと思っても心臓が弱いからそんなことは絶対に出来ない。宗教家はそういう善人を見て悪くはないが信心が弱い、もっと不退転の信仰を持つべきだという。だけれども、そういう善人は悪人から受けるのとは別種の威圧を宗教家から受ける。そして次第に自分の穴の中で生きようと思ったり、貝になりたいとか星になりたいと思う。

このような善人は今の社会ではいつもくすぶって表面には出られない。所謂マスコミに登場するようなことはないだろう。底抜けの善人で万身これ善意という人間がいる。そういう人間はいつも下積みになれているが、本人はそんなことはあんまり苦にならない。ただこういう善人の悩みの種は心臓が強くだライでチャッカリしている悪人（法律的な悪人では



ないとしても）が彼等に圧力をかけることである。しかも仏さまは悪人を済度する方に重点をおかれるわけだから、彼等善人の済度は後廻しになり勝ちである。悪人共はドライで心臓が強いから神や仏を信じないから念仏も何も知らない。仏さまは悪人共ばかりサービスして自分達をかまってくれない。これでは自分達善人はとても往生出来そうもない。このように現代の善人はそこはかとなくウェットになってくる。

大いに張り切って元氣よく働いて能率をあげている人々の中には弱い善人の氣持なんかで問題にしていけないものが多い。現代は生存競争が一番露骨になっている時代ともいえよう。ラッシュアワーの電車に我勝ちに乗るような有様で、それを一種のスポーツみたいに思っているのだからやりきれない。

心臓の弱い善意の善人は昔の偉いお坊さんのような立派な人間ではない。絶えず心臓の強いドライな悪人から自分を守って行くだけでクタクタに疲れ切ってしまう。仏さまへのお願いは悪人正機とやらをこの際中止して、自分達弱い善人を済度する方へ重点を置いていただきたいことである。悪人なおもて往生

を遂ぐ、いわんや善人おや……というようにして現代はもらいたい。つまり善人なお往生するというところにしてもらいたいものだ……とこういうふうに関代の善人は歎いている。

さて私は或る日右のような愚痴(?)を或る種の善人達から聞かされた。そういう「善人」は真に法然上人を理解していないのか、或いは浄土というものが解っていないのか、私は色々考えさせられた。若しこの種の善人が真実の信仰の不足から難を避けてお寺に来たとすれば、お寺はどうすべきであろうか。また若しこれらの善人が現代の悪人から身を守るためにお寺に来たとしたら、更に現代のお寺に来る人々がこのような善人で大部分あるとしたら、現代のお寺はどうすべきであろうか。或いは現代のまじめなお寺がこの種の善人にのみ主として接しているとしたら、第一にお寺はこの種の善人をどうするか、第二に彼等以外の無縁多数の悪人をお寺はどうすることが出来るか……色々なことが私のお粗末な脳裡に去来した。初めに申した通り非常に脱線したことを書き記したことを伏して御詫びする次第である。

夢の中のお念仏

樋口 亮 栄

いくら実話だといっても、自分のみた夢の話を上上げて恐縮に存じます。若い人は夢などに興味もないし、第一問題などにする者はありませんが、私ぐらいに老人の側に近ずいてくるに従って、内蔵の方も草臥れてくるためでしょうか、五臓六腑の患いだという夢をみることになるのでしょう。

子供はゴロリ横になると、すぐ熟睡します。もう寝てしまったヨ、と安らかな子供の顔ののぞき込むことは、親としての幸福感を最も強く持つ時であり、それこそ眼の中に入れても痛くない可愛らしさを子供の顔に感じます。それが成人し、門松の下をくぐる数がふえてくると、純心さを失って、床に入っても容易にねつかれない

くなります。起きている時と睡った時との境目、その移り替るその瞬間というものは、私にはどうしてもわかりません。フト気がついて、これは夢だったか等とわれながら不思議に思うことすらあって、この瞬間を意図することができません。

生物は元来睡っている姿がほんとであつて、外界の刺激によって諸活動が起り、目覚めている方が仮の姿だという学者すらあり、どうやら今以て睡眠とは不思議な世界であるということに変わりはないようであります。

私も御多分にもれず、フロイドの夢判断にこつたこともあります。また火事の夢をみて焔が赤かったように思い、夢にも色の感覚がある等といきんだこともありました。夢の世界がたとえ無意義にしる経験したことに限ら

れたものかどうか、私には未経験の場面も夢にみることもあると信じています。

さて私のみた「夢の中のお念仏」を申し上げます。たいと存じますが、荒唐無稽いだと一笑に附されそうで心配です。内容からみれば、たしかに馬鹿馬鹿しいことですが、私に対してこの夢が重大な影響を与えたものであります。

私は野原のような所に立っていました。浅間の高原といった感じで、広々とし、これという樹木もなく、川もありませんでしたが、一方から高い丘になっていました。気がつく、私と同じように大勢の人が立っていました。その内にこの人達が一世いに丘の方に向きを変えたので、私も丘の方を眺めました。すると丘の上から大きな人が、こちらに向つて降りてきました。

どこかでみたような人でした。お不動さまかなと思いましたが、手に劔を持っていないので、お不動さまではありません。閻魔さまかなとも思いましたが、頭に帽子をかぶっていないので、これも違います。こちらに近づくに従って、これが巨人であるのに気がつき

信 仰 実 話

話 実 仰 信

ました。ユリシ리즈の巨人かと思いましたが、目が二つあるので、そうでもありません。

この巨人はしきりと、私たちに話かけていました。天来の声というった感じでした。

とにかく現代社会を罵っているのでした。愚連隊の横行、男女の無節操、労資の対立、思想の混乱、その他要するに世相のさまざまについて憤っているのですが、内容はよく聞とれません。

巨人の姿はますます大きくなってゆくように思われましたが、私が周囲を見廻してみても実は私たちが段々小さくなってゆくのに気がつきました。五尺の身体が一尺になり、五寸になり、まるで虫けらのように地面一ぱいに動き廻っていました。私はこれこそ末世だと思いました。

巨人がいかにかいでも、朱儒たちはただ喚くばかりです。巨人は遂に怒りました。巨人は私どもを一つ一つ潰してゆきました。私たちは精一ぱい逃げましたが、巨人にはかなうわけがなく、片端から潰されてゆきます。い

よいよ私の頭上に巨人の腕がのびてきました。私は叫び声を発するより早く、一声お念仏が口をついて出ました。その途端に巨人の姿が遠くに離れました。そして離れた所で、巨人は朱儒たちを追いかけて潰して廻っています。私は逃げるのはこの時だと思いました。私は焦りました。しかし悲しいかな焦るほど自分の足が動きませんでした。

私は絶望して目を閉じました。どの位の時間がたったのか判りませんが、私が気がつくのと私の周囲には何も見えませんでした。なんとなく私の身体が浮き上ったような、軽くなつたように思いました。よくよく気がつくと、私は宙に浮いていました。しかもかなりのスピードで空を飛んでいるのです。実は、私は大きな驚にさらわれてゆくのでした。

やがて私は山の上に降ろされました。氣をつけてみると、そこは比叡山でした。お堂の形に見覚えがあります。杉の立木が亭々とそびえています。その内の特に大きな杉の上の方に小天狗が沢山群っていました。その杉の根もとのところに、大天狗がデンとかまえていました。私は天狗をみても、さして恐しい

扉の御法語

お念仏を申せば、それで必ず往生できると教えられ、ゆめ疑うわけではないものの、さて省みて私ごときものでも、ほんとうに大丈夫なのだろうかと気になることがあります。もう少し詳しく教えを説いて頂いて安心したいものであります。

と、ある人が上人に質ねました。上人はいつもながら、相手の氣持をくんで、やさしく説明されました。

男でも女でも、貴い人も賤しい人も、善人も悪人も、こんな区別はアミダさまのお目からみれば同じ衆生としか見えません。従って熱心に誠を捧げてお念仏を申せば、それだけで往生することに間違いはありません。たとえば、木であろうと石であろうと、鉄であろうと油であろうと、舟にのせて海に浮べるならば、どんな大海もあれ狂う風波をこえて、万里を運ぶことができます。

このように上人はアミダさまのお力を、舟にたとえて説かれ、更に詞をこう続けられました。

という感じがなく、さすが叡山には天狗が住んでいたので、何か当然のように思いました。

私は天狗を認めて、逃げ出すのも何か疑われるようであるし、もちろん近づくわけにもゆかず、つまらない所に来てしまったと後悔しはじめました。私のこんな気持ちを察したのでしょうか、天狗が例の団扇を大きく煽りました。するとさっきまで梢のあちこちにいた小天狗がサーッと一度に舞い降りてきました。

いつの間にか来たのでしょうか、私の周囲に、朱儒たちが大勢いました。かく申す私も朱儒の一人であり、小天狗といえども私の身長よりはるかに大きいのに気がつききました。小天狗はこの小さな人たちを獲物をあさるように追いかけ始めました。

信 仰 実 話

その内に大天狗が小天狗に命令している言葉が聞えました。天狗たちは、地上の悪人どもを叡山から駆逐するために、この人々を退治するといふのでした。これを知った私は、私も退治されると思いました。

こう感じると、今まで他の人々を追いかけて廻っていた小天狗たちが、それをやめて私に向い一せいに襲いかかってきました。天狗の鋭いくちばしが、やがて私の頭や胸やその他全身につきささるに決っています。

絶対絶命の私は、ごく自然にお念仏を唱えました。誠心こめてお念仏を唱えると、その一声一声に小天狗の一つ一つが私の直前まできては反転してゆきます。

私はお念仏を唱えながら、フト気がつく、と、さっきまで群っていた小天狗が、みな鳥になって飛び去ってゆくのが見えました。

夢からさめた私は、すっかり睡気をなくしてしまいました。月光が硝子戸を通して室内を明るくしていました。虫の音がいかにもすがすがしく夜の空気をふるわせていました。

私の夢の話は以上で終りですが、私のお念仏の信仰は、この夢をみた晩から芽ばえたものです。私とても夢にみたことを気にするものではありませんが、そんな理くつではなしに、私の今のお念仏の生活は、それ以来のものであるのは事実です。

他力がある以上は自力もあるわけです。自力とは自分の努力によって、煩悩をなくし、悪業を断じつくして浄土にまいり、菩提を証するわけで、これはけわしい山道を踏破するよりもっと困難なことです。

従って生来頑健な身体にめぐまれ、訓練を積んだ人なら、あるいはどんな山ものり越えることができるでしょう。

さてここで、私自身はどうでしょうか。慢心している人は別として、刻々に押し寄せてくる煩悩を断じ、悪業を避け得るでしょうか。静かにわが身を省みるならば、この質問者と同様に自分の力の弱さを嘆くのが正直というものでしょう。

他の御法語に

「かなしきかなや、善心はとしどじにしたがひてうすくなり、悪心は日々にしたがいていよいよまさる」

とあります。上人ほどの偉人なればこそ、その反省がかくも強いのだと申すべきであります。

よく理くつをいう人があって、自分が一番正しいと信じ込む人があります。信仰から遠のくばかりで縁なき人というべきでしょう。

近代高僧伝

神谷大周



宗学の流れに賢州・鸞州・大基と次第する学脈があったという。その大基について宗学を究め、学脈の正統を任じていたのは神谷大周であった。

彼は名古屋城下の永安町に天保十二年（一八四一）正月四月日生をうけ、父を神谷伝左衛門といい、幼名を季吉といった。濃尾平野の一角にそそりたつ金城を朝にあがめ、夕べに臨んで若き血をたぎらせても、世は封建制度下におかれ、自己の能力を充分にのばし、栄職につくといふことは到底望みもつかない。強いて学問により志をのばすとすれば、出家を志さずより外に道はなかった。まして濃尾の地は信仰厚く、一族中から出家者をだすことを喜んだという美風の残された地であ

る。学問を好む多くの人たちが僧となったのも故なしとしない。季吉も其の例にもれなかった。彼は弘化三年六才の時母を失い、九才の時縁戚の大阪中之島にいた後藤松陰をたよって上阪し、ここに寓しながら尼ヶ崎の小竹長平の塾に通い、経書を学んだが、時に成績抜群で学生一千人中三秀の一人に数えられたという。翌嘉永三年六月、名古屋建中寺の立誉大基を拜して剃髪し、名を大周と改め、安政三年八月東遊の途にのぼり、増上寺や伝通院に掛錫して宗学を究めた。しかし大周の学んだのは宗学ばかりではなく、俱舎因明も修めれば、禅学も学び、其の学たるや広く他人の追従を許さぬ程であった。

彼の念頭にあってはなれぬものは学問のみ

であったが、その彼をして心機一転せしめ、布教にも力をいれさせるようになったのは明治維新による教界の振動であった。排仏毀釈の声があがり、破仏が実行に移されたと聞いた心ある人たちは、何とかして此の危急を救わんものと奮起したのである、明治二年四月各宗同盟会を組織して、谷中天王寺に集った面々は唯我昭舜、赤松光映（天台）、高岡増隆、大崎行智（真言）、諸岳変堂、久我環溪（禅）、優陀日輝、新井日薩（日蓮）、大洲鉄然、島地黙雷（真宗）という諸宗きつての人たちであったが、その中に浄土宗から参加したのは福田行誠・大谷良胤と大周の三人であった。時に大周二十九才という若さで、越後地方の勧説にまわり、排仏の非を説き、特に同五年以来諸国に遊説布教したが、奥州地方の布教は最も苦心したところであるという。というのも、此の地が維新なりて既に時を年を経ているとはいふものの、佐幕反皇の策源地で、人心未だ全く皇化に服したわけではなく、遺風を墨守していたからであったらしい。

越えて二十七年八月のこと、戦火は開いて日清戦役となった。時に浄土宗執綱であつた伊達靈堅は、一度び戦が行われた上は、国民が一体となつて力つくさなければならぬと愛国の道を説き、軍隊を慰問して協力すべきことを提唱した。この提唱とても、何等阻止すべき理由をすら見出し得ない陸軍省は、早速にこの申出を許された。管長の野靈瑞自か



ら率先して軍隊慰問におもむくべきを決意し、大周これに随従することになった。これが所謂軍隊布教の最初となつたもので諸宗にさがけた事業である。北白川宮能仁親王といへば、日清戦役時に功勞をたて、台湾で生涯を終えた将星であるが、軍隊布教に赴いた折は、時偶に大阪師団の師団長をつとめておられた。時に親王は「自分は曾って東叡山輪王寺宮良現法親王として桑門にあつた身である。しかし今は軍務に身を投じ、仏教を宣布することはできない。軍隊に仏教をとり入れることは必要とは思ふけれども実現すること

は至難である。どうか師は宣しく仏教の面目を發揮して、以て士氣を策励するようにして欲しい」と申されたという。北白川宮に於て、曾って仏門に身を投じていたという因縁で、仏教には特に関心をもたれていたということとは、その間の事情を知る者はともかくとして、既に仏門を去られてから二十数年の歲月を閲している今となつて、親しく仏教の興隆を願われていることをきいた大周はいよいよ身を振りおこして、仏教の弘教に力を入れる覺悟を新たにしたのであつた。誠に仏教によつて結ばれた因縁ほど偉大なものはない。

これより先生、明治十二年四月、特命により、推されて靈巖寺に住したが、十四年一月神田に発した火は烈風にあおられて江東にまで延び、靈巖寺は烏有に帰したが、八年の長きに亘る再建の努力は漸く実を結び、二十一年三月旧觀に復するまでになった。しかしそれを束の間大正四年には、大周在住時にして、二度目の灰燼という憂き目を見なければならなかつた。彼の悲嘆や如何ばかりであつたろうか。

仏寺の再建は容易な業ではない。否一生をかけての大工事なのである。しかもそれを二度までなさなければならなかつた彼の意中や察するに余りある。大正二年四月大僧正となり、十月司教となつた。勸学に叙せられたのは明治四十四年二月のことであつたから、浄土宗として最高の榮譽をになうことになったわけである。さしも東奔西走、学徒の提撕に布数にと寧日なかつた上人も枯木のおれるが如く大正九年二月二十五日、八十才を一期に安養の浄土にかえられた。法名を円蓮社齋譽上人聖阿普該大和尚という。

(大橋俊雄)



釈尊の生涯——(三)——

佐藤密雄

ヨーガの修行 伝えるところによると、出家を決意した釈尊は、暗夜ひそかに、御者のチャンナに命じて、白馬カシタカにまたがって城外に出られた。馬を走らせた釈尊は、黎明のころ、アノーマ河に到着した。その河畔で馬をとどめて、衣服を脱ぎ、出家者となる準備をととのえた。王子として身に着けていた衣服や持物などは、チャンナにわたして、白馬とともに城内に帰らせ、父王に出家したことを伝えさせなのである。そして、自分はひとり、中インドの新興国家である、マカダ国の首府王舎城にむかって、旅び立ったのであった。果して、釈尊が、伝説のように家族の寝静まったときに、深夜ひそかに逃れるようにして城内を出でて、出家したものであるか、どうかは、いまの私た

ちには理解しがたいことである。出家することに反対する者は多かったとしても、深夜に人目をしのんで出るというようなことは、事実としては信じ難い。或いは、すでに出家することが、誰れにも明らかな場合でも、このようにすることが、その時代の出家の一般の形式であったのかも知れない。勿論、出家ということは、当時の青年たちにとっては、非常に望ましいことであつたが、その父母や妻子にとっては、あまり好ましいことではなかつたであろう。そのような意味を強調して、深夜ひそかに、家族のすきをみて出家した、というような表現を用いたものとも考えられる。

出家した釈尊は、中インドのマカダ国の首府である王舎

城についたのであるが、ここは、新興都市であり、経済文化の中心をなしていたので、多くの宗教家が滞在していた。釈尊はここで二人のヨーガ行者、アーラーラ・カラーマとウツタカ・ラーマプッタとを相ついで訪れて、おしえる乞うたのである。ヨーガとは一種の坐禅であるが、心を統一することから次第に進んで、長い時間無心の状態に入ることを行するもので、その無心の状態を一種の宗教的至楽境となつて、これを生死のある生存からの解脱の状態に比類しようとするものである。釈尊は、この二人の行者のもとで、それぞれ熱心に学修し、その進歩の早いことを称讃されたほどであるが、しかし、釈尊自身は、精神統一の法としてはその方法を学んだけれども、無心の状態を宗教的境地とすることには満足することができなかった。そこで、釈尊は、かれらのところを相ついで去ることになったのである。

ピンピサーラ王の訪問 伝えるところによると、釈尊が、ヨーガを学んでこれに失望した頃に、マカダ国王であり、王舎城主であるピンピサーラ王が、釈尊をパンダバ（槃荼婆）山という処へ訪れた。そして、出家をやめて父王のもとに帰ることをすすめて、力を合せて、コーサラ国を征服しよう提議したのである。

しかし、釈尊は、その好意を謝しつつも、もはや世俗的な政治闘争に加わる意志のないことを告げた。王もまた、釈尊が宗教的な栄光をえたときは、まず王舎城にその福音を伝えるように求めて、別れたといわれる。また、丁度この頃に、父のシユドダーナ王も、釈尊の出家の止めがたいことを知って、一族のもの五人を選んでおくり、釈尊に同行して、修行させることとしたのである。

六年の苦行とその放棄 ヨーガを学修して失望した釈尊は、こんどは一人でなく、父王から派遣された五人の同行を引きつれて、尼連禪河という流れの東岸にある、苦行林に入りいられた。ここには、沢山の苦行者が苦行によって、至高の宗教的体験をえようとして、狂熱的に、さまざまな苦行をなしていたのである。

苦行とは、節食や断食をすることだけではなく、肉体に苦痛を感じるような、特別に困難な身体の形式や、危険な状態の姿勢を長時間つづけること、例えば、無数の釘の出した板の上に坐臥するなど、のことをなすものである。釈尊は、一日に一粒の穀物を食するような、きびしい断食をなし、また、多くの人のなしえないような、はげしい形式の苦行を求めて実行した。その烈しさに多数の苦行者は感歎して、一様に、「もし、苦行で宗教上の目的を達成するも

のがあるとするれば、それは「ゴータマであろう」と称讃をしたとも伝えられる。

釈尊のこのような修行は、六年間もつづいたのであるが、しかし、六年目に、ついに釈尊はこれを放棄するに至ったのである。釈尊は六年間の苦行実践によって、苦行を宗教行とする人びとは、肉体の苦痛感をば、宗教的快感に倒錯する努力をしているにすぎないことを知り、これを放棄された。しかし、この苦行の放棄を見た、五人の同行や多くの苦行者達は、烈しい釈尊の苦行の効果に期待するところが大きかっただけに、その失望もまた大きく、「ゴータマは、ついに苦行から没落した」と非難した。五人の同行のごときは、釈尊を見かぎって、遠く別れ去っていったのである。しかし、釈尊自身は、六年の熱心な修行によって、苦行の無益さを確実に知りえたので、これらのことには何の心の動揺することもなく、更に、新たなものを求めんとして、今度はまた、唯一人で苦行林を出られたのである。

ヨーガと苦行 ヨーガも、苦行も、ともにバラモンの哲学に基いて起ったもので、その後の新宗教家もこれを修したのであるが、その本来の目的は、肉体の勢力を制限して、精神の自由を拡大しようとするものであった。バラモ

ンの宗教聖典は、ベータと称するが、このベータについて研究された哲学を、ウパニシャッド哲学という。この哲学が、その後のインドの宗教思想の中心的な考え方となったのであるが、この考え方によると、永遠不死の世界は、梵と称する精神界で、これは世界の真実をなすものである。

そして、私ども人間の内面にも、アートマン（小我）といわれる精神的な実体がある。これは、いわば人間の真実自我、もしくは真実精神というべきものであって、このアートマン（小我）は、元来は世界の実体である梵（大我）に入るべきものである。そして、梵の精神界に安住してこそ、永遠の幸福を得るのであるが、いまはしかし、肉体や肉体的欲望に束縛されて、本来の意義を発揮する自由をうしなって、梵に帰一できないでいるのである。そこで、このアートマン（小我）に梵（大我）へ帰一する自由を得せしめるために、また肉体とその欲望を制御するために、ヨーガをおこなうのである。従って、ヨーガは、肉体的な感情や感覚を鎮伏するのを目的とするものである。また、苦行も同じ目的をもつもので、烈しい苦行によって肉体を弱め、肉体的な感情や欲望を起らぬようにつとめて、アートマンの自由を増大して、梵への帰一を計ろうとするものである。

従って、ヨーガも、苦行も、考え方はきわめて素朴であるが、その考えの根底には、先きにのべたように、個人の精神的実体であるアートのマンの世界を、世界の精神的実体である梵に帰一させようとする考えがあった。これを、梵我一如の哲学ともいう。これはまた、インドのすべての思想に共通的な根本の考え方である。それは物質は不浄であり、有限であり、苦なるものであるのに対し、精神は清浄であり、永遠であり、静寂なものである、とする考えから来ているのである。

しかしながら、当時の職業的なヨーガ行者や、苦行者のなかには、どれだけこの本来の意義を知って、これを実践していたかは疑わしい。大部分のものは、ただヨーガ行や、苦行をなして居れば、やがて、なにかがあるとして慢然としてなすか、或いは、宗教家として生きる形式として、これをなしていたものも多かったようである。

しかし、釈尊が六年の苦行をつづけられたのは、ただ慢然と行ぜられたのではなく、実践と、それを裏づける理論とを研究して、その不合理なことを見きわめられたから、これを放棄するに至ったのである。

独断思想の排除 釈尊の考えによると、苦行、ヨーガは、有限な肉体の内面に、永遠な精神の自我があるとすること

は、一つの独断にすぎない。生死する肉体から、不死の精神的自我を脱出せしめることが、生死解脱であると考えられているが、この肉体の心理的、肉体的はたらきるときに、不死の精神的実体があることを事実として確かめることはできない。あるとするのは、ありたいとする願望がつかまって、あると独断したにすぎないのである。また、このあると独断された精神の落つき場所として、世界の實體としての精神界である梵であるとされるが、これもまた、あってほしいとされたものが、あるべきである、とされたものにすぎない。現に実在することを確かめて、あるとされるものではないのである。

釈尊が、これらの思想や、実践を学んで、ついに、これを捨てられたのは、このような事実として確かめられないものを、想像したり、独断したりして、その上にいくら高級な理論や実践をかさねても、それは、あこがれの夢をえがいて、その自分の夢に、喜びや悲しみをもつと同様である、とされたからである。そこで、釈尊は、事実を先きにして、事実を確かめて、その事実から理論を見るようにせねばならない、とされたのである。例えば、人間には、生と老と死という、まぬがれ難い事実がある。何人にも明らかな事実であるとすれば、この事実を出発点として、人

間は、生、老、死するものであるが故に、人間は無常のものである、とするがごとき仕方である。

このような、ものの考え方は、釈尊に至るまで、何人も考えなかったことであり、ヨーガや苦行を吟味し、批判した釈尊によって、はじめて見出された立場であった。これは、学者によっては、ヨーロッパでは、釈尊より二千年近くの前に、カントによってなされた哲学上の輪廻に比較される、ともいわれる。そして、このような思想的立場が、釈尊によって打ち立てられたのが、つぎにのべる、成道の内容にほかならないのである。

降魔 六年の苦行を無益なことであった、と考えて、これを放棄した釈尊は、苦行林を出でて、尼連禪河で身を洗い、対岸にのぼって、身心の静養と健康の回復につとめられた。

伝えるところによると、尼連禪河に浴した釈尊は、苦行で弱っていて、水流におし流されようとしたが、漸く河中に出ていた木の根につかまって、岸にのぼったといわれる。また、このように、衰弱した肉体の健康をとり戻すために力となったのは、衰えた修行者である釈尊をみて、これに乳粥を献じて、看護につとめた牧女スチャータであったとされる。健康を回復した釈尊は、今度は、ウルピラ

（優楼頻羅）という村の、ピツパラ樹の大木の下にある石上に坐して、思惟に入った。

おそらくは、ヨーガを学び、苦行を行じて、古い宗教上の教えや行法をことごとく吟味して、そのどれにも満足できなかったものでこんどは自分自身で、真実の道理を見出そうとされたのであろう。

經典の伝えるところによると、思惟に入った釈尊のまえに、美女の姿をした妖魔があらわれ、欲情によって思惟を乱し、愛欲の世界へ墮落させようと誘惑したが、釈尊は、これを克服してこの妖魔をしりぞけた。つぎには、多くの悪魔が、武器などをもって強迫して、邪見に引き込もうとしたが、これにも恐れることなく、うち克って退散せしめることができ、やがて、静かな思惟をつづけることができた。そして、その思惟は、昼間をすぎて夜に入り、インドの数え方でいえば、夜の初更に、大智眼をえて人間生活の世相を見、第二更には、神通眼をえて人間生存の真実相を見、第三更には、真実相と外面の世相とについて因果の道理を見、最後に第四更に入って、一切智を完成して、全世界がわが所有であり、全人類がわが子であるとの確信に達し、自分は覚者、すなわち仏陀となったという自覚に到達されたのである。

この經典の伝説のはじめの部分の、妖魔や惡魔を克伏するところを降魔といい、その後、大智眼をえて、ついに一切智に達するのを、成道というのである。降魔のなかで、欲情の墮落へ誘い込もうとする美女の妖魔をしりぞけた、ということとは、釈尊が、真理を見出すためには、一切の感情や欲望を前提としたり、その制約をうけてはならないとして、理性を感情から独立することにとめられたことを表現するものである。たとえば、肉体は死しても、精神は不死でありたいと考え、更に、その精神が、永遠に生きる精神界があるべきだとして、そのような感情的な願望を前提として、ものを考えては、はじめから感情に支配されたもので、真実を見出せないのである。

見道と修道 人間は理論を理解できても、たとえば、人は死ぬものであると理解していても、愛している人びとの死に遭えば、だれでも深い悲しみにおそわれる。その悲しむということは、人間的であるが、理性的には、人は死ぬという理論に徹したものでなく、むしろ理論を否定しようとする感情的な現われである。仏教では、理解することを見道というが、見道は容易にえられても、それでは満足できない。見道につづいて修道というものが必要である。理解したことに、徹底した生活をする努力を修道というので

あるが、この修道が、実は仏道の本来である。この修道を完全したときが、無学道といわれ、これはもはや、つとめずとも、理解した道理さながらの生活に至ったことで、その理解したことの悟りに達した状態である。いわば、その理解したことだけについて覺者となったといえる。

いま釈尊が、欲情のさそいをする妖魔をしりぞけたとは、完全に、肉体的な感覚や感情に支配されない、純粋に、理性を独立してはたらかせる立場をきづいたことを表現したものと見える。また、邪見をおしつけようとする惡魔の強迫を克服されたことは、釈尊が、古い思想とは全く異った立場に立たれたことを、明かにしているものである。

・ 釈尊の時代にいたるまでのインドには、すでに一千年の思想史があり、各種の思想の理論があつたのであるから、そのいづれかによって、理論を立てるのはもつとも安易な方法であつた。しかし、釈尊はこれを避けられ、とくに重大なことは、インド思想のすべてが習慣的に陥入っている欠点、すなわち事実よりも、このようにあるべきであると觀念する独断がさきに立つことを、断然避けられたことであり、このことを、邪見の惡魔の克服として、表現されているのである。

浄土歌壇

山形野々々代選



天

人

青森 井上 きつ
山間の小さき町の大川に両手の如く橋二つあり

評 清爽、"両手のごとく"が利いています、どんな人々が住んで、どんな生活をしているかとなつかしく想像される歌です。

地

東京 三宅 清子
子の汗を拭ひし手もて今日もまた墓石を撫でぬ幾たびとなく

評 亡き子の臨終の時、噴き出る汗を母の私はつき切りで何度も何度も拭いとった。その同じ手で、今日も子の墓に来て在りし日に子にいたように、墓石を撫でて、押え切れぬ悲しみの歌です。

大阪 清水 虹二
帰らざる息子の部屋に移り来てよくぞ堪へたるこの二年を

評 家出して生死不明の息子を持つ父親の哀切な心持ち、よく狂はなかったものと嘆きの深さを省みた歌。

北海道 阿部さち子
異国なるナポリの港思はするきんせん花の末濃紺の海

東京 石谷てい子
病院より亡がら抱きて帰りしは祭の夜なり笛の音ぞせし

仙台 鳥山 良子
三十路越え半ばを過ぐるひとり身に巷の噂さ高く大きく

鹿児島 串岡 君江
深水の画く女か苔寺の庭に蛇の目を傾けて立つ

川内市 児島登喜子
たそがるるテラスに刻々開きゆくクジヤクサボテンの大き紅

静岡 沢田 岳潤

看とりする人もあらず血を吐きて荷風死せりとラジオは報ず

東京 紫藤よね子
置き放つ車の屋根に椎の花一面ちりぬ坂となる道

福岡 吉末 林堂

朝風に波うちゆるる竹藪の影まくら辺の壁にうつれり

東京 牧尾多希子
雲仙のわか葉は海になだれつつ青波しぶき寄る海も見ゆ

富山 水野その子

夏至の風吹きてなつかし紫のあやめが池と駒下駄の音

神奈川 熊坂 満
会下の僧青葉の寺の床に坐し禅定に入るしづかなる午後

高岡 竹上 盛衛

能登の海夕日を映し火と燃えぬ若きをのこの憤怒の姿

東京 うへのつねや
朝な朝な来なく小鳥に幸をしづかに思ふ床に臥しつ

富山 綿関 村

かたかごの一叢ゆゑに万葉の昔をしのぶ古府の山寺

高岡 関 理人
桜さき霞める伊豆にひたひたと金を流せる海のたそがれ

東京 張山はるみ

使して帰るわれをばはたきもて埃はらふとこの家の主婦

東京 物部さよ子
ビニールをかぶり気安く旅人は小雨ふる夜の京極を行く

東京 葛岡 利子

去年のまま吊りし風鈴夏の来てまた新しく涼風を呼ぶ

和歌山 中川 誠一
葱安くすすめかねたる温水のタンク喜び部落人買ふ

東京 平川 ウメ

夏来るや淡水色の衣着てわが胸に住む一人のをんな

高岡 清田 文子
大雨に水量増して橋と空映じてありぬ濁流なれど

鹿児島 長崎 恒子

饒舌の客去り波紋しづまりし深淵に似る方丈の室

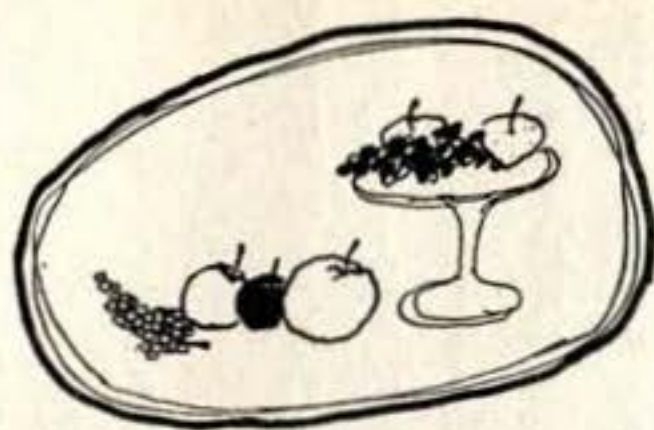
高岡 八島 美雄
時忘れしはしまどろむ昼餉時桃源境と思ふ山寺

名古屋 堀江真鯉夫

牛乳を盗みし子をば追ひたれと思ひなをして逃がしやりたり

富山 山本 保子
美しき花を作りし村人は子の無き人とききて吾子抱く

仏教にかみつく



山 田 登

みも、頭からけなすわけには行かぬかも知れない。

一
何が馬鹿気ているとって、お寺の坊さんが、わけのわからないお経を読んでいるのを、わかったような顔をして、聞いている程、馬鹿気たものはない。

もっとも、この頃は、フランス語のフの字も知らないくせに、シャンソンか何かを歌ったり、それをまた、いい気持ちになって聞いたりすることがはやるのだから、お経の棒読

まあ、両方とも同じようなものだから、目に角立てて、文句をいうのも大人気ない。それに、人間というものは、往々にしてトトカマである。ことに、年を取ると、知らないことも知ったような顔をする癖がある。何が何だか分らないお経も、何度も何度も聞いているうちには、分らないながら、何となく、ありがたくなって来るのだから、不思議である。いわゆる「気分」というものか。此頃は、「ムード」ということが流行して、ムード喫茶、ムードスタイルなんていう。何が何

だか分らないものが、若い連中の間でもてはやされている。

ムードという点からいえば、シャンソンもお経も、確かにムードがある。若い人々が、仏教は古くさい。お寺は陰気だとけなすけれど、そういう君等が、喫茶店の隅で、うっとりとして、ためいきをつきながら聞いているシャンソンだって、決して新しいものでも、陽気なものでもないじゃないか。

二

それにしても、どおして、仏教は若い者に人気がないのか。創価学会のように、青年部の盛んなところもあるにはある。しかし、あれは決して、青年が仏教の教理や信仰に、本当に協鳴して集まっているのではない。大勢の仲間の中で、ただ何となく、ワアワアと騒いでいるだけのことである。早い話が、この頃はやりの社会心理学でいう、「集団への逃避」である。普通の社会生活や家庭生活でみたすことの出来ない不満や欲求を、ああした、同類項の中で、形をかえて満足させているのである。だから、大勢、集って来るのである。此頃の若い連中は、丁度、アゴを出し

たマラソン選手と同じで、頭ばかりが前へ出て、足の方が少しもいうことをきいて下れない。だから、考えることや言うことは、一人前以上なのだが、足が地についていないので、することは、半人前。

ところが、仏教の信仰、特に念仏の信仰というものは、現実の、毎日の生活の中に基礎を持つもので、日々の生活がすべて弥陀如来と祖先の霊とにつながって営まれているのである。そうした、宗教の現実性をぬきにして、頭の中でだけ、今の仏教は古臭いとか、お寺の坊さん何をしているかなどという。どおしても、若い者には、少くとも今の仏教は、素直おにうけとれないようである。

これには、坊さんの方にも責任がある。

「なーに、子を持って知る親の恩で、若い者もいつまでも若くはないさ。そのうち、年をとって来れば、信仰の味も分るようになるものだ」若い者が年をとるのを黙って待っていたのである。先ばしりした頭の中の回転が、段々におさまって来るのを、気ながに待って、丁度よいぐらいのところまで、「さて、仏教というものはちゃ……」とお説教をしてい

るのである。若い人々も、世の中というものが、自分の思い通りにゆくものではないことを段々知り、どおやら、自分の行く先きが目にみえて来るようになる、今まで夢中になって走らせていた頭の回転を周囲のものと調子を合わせるようになる。生活と考えとが一致して来る。そうなる、それまでは魂が奪われでもするように感じていたソヤンソンより、お寺の本堂で聞くお経の方にムードを感じるようになって来る。これでまづ、めでたし、めでたし、というわけで、今日まで仏教があらぐらをかいて来たということになる。

「お寺詣りは老人の役目」とされるのも、むべなるかなである。

三

ところが、この頃は、人間の平均寿命がのびて来た。いわば、人間全体が少々若返って来たわけである。そのためかどお知らぬが、一層、仏教が古くさく感じられる。人間が若返ったのだから、仏教も大いに若返って貰いたいものである。若い者が年をとるのを待つばかりが能ではない。そういう仏教自身も、ホルモン注射でもして、少しは、若い

者むきに若返ってはどおか。

かみつくばかりが能ではない。ここらで仏教の若がいり法を考えてみよう。これには色々あるだろうが、何といっても、一番肝心なことは、実際の生活と一つになることである。西方極楽もよいし、念仏往生もよい。先祖の供養も大切である。しかし、実際の生活はもっとさし迫ったものである。地球は二つの陣営に分れている。宇宙ロケットは頭の上をまわっている。原爆禁止の是非が論じられている。こんな大きな問題はとに角、学校を出る息子の就職がきまらない。中気で八年もねているおばあさんがいる。会社では首切りが行われようとしている。毎日の通勤に混んだ電車でクタクタになる。どこをみわたしても、面白いことはない。そんな毎日の生活が迫って来る。こんな中にいて、どおして、来世往生で満足出来ようか。もっと、そのものズバリで、現在の悩みをふき飛ばして下れるものはないだろうか。

仏教が若返えるには、まづ、こうした、一般大衆の、ありのままな不満や欲望を解決することである。それには、仏教——というよ

り坊さん達は、自分の住んでいる、この現実世界をしっかりと心に刻みつけてもらいたいものである。むづかしい言葉でいえば、「現実把握」の上に「現実批判」をしてもらいたい。「平和運動は」ときかれれば、「それはこうである」と答え、「家の病人が」といわれれば、早速出かけて行って見舞ってやる。

「息子の就職が……」とたのまれれば、壇家や知己をめぐって適当なところを紹介してやる。宮沢賢治の歌を実行すればよい。賢治は熱心な法華経信者だった。それだからこそ、普通の詩人とはことなつた、非常に強い実践力と感化とがあつたのだ。念仏信仰に貫ぬかれた、念仏信仰を基にした、現実批判こそ、若返りの要諦だと思う。

頭の中だけで、グルグルまわりをしている現在の青年達が、一番欲しがっているのは、このグルグルまわりをどこかで断ち切つて、おもてにとび出す方法である。これを与えずして、仏教は永久に若い者の胸に抱かれることはないだろう。

西洋の偉大な詩人ワーズワースの言葉に「子供は大人の父である」というのがある。

(童)(心)(仏)(心)

へそくり

「おじさんにも へそくりがあるでしょう？」

幼稚園にいつている隣の三ちゃんが、縁側からあがってくるなり、私にききました。

「へそくり？ そんなもの持っていないよ。」

何とおませな子だろうと思つた私は、顔もあげずに答えました。

「ないの。へそくり本当にないの。」

なおも、くいさがる三ちゃんに、

「誰がそういつたの。へそくりなん

て。」

私が思わず声を大きくしたので、おどろいた三ちゃんは、二、三步後にさがる

と、
「ラジオでいつたもん。ぼくだつてあるのにさ。」

と、口をとがらせると、くるりとふりむいて帰ろうとしました。シャツをまくりあげて、自分のおへそを見ながら。

(あつ。そうか。彼はおへそのことをいつているんだ。)

「へそくり」イコール「おへそ」と思つている三ちゃん。私は苦笑しましたが、両者の相違と私の誤解をあやまるために、三ちゃんの後を追いました。幼児に対するには、短気は禁物なのです。

(輝)

現在の仏教者は深く味うべきである。

仏教にかみついたが、かみつきそこねて、

自分をかんだような恰好になつてしまつたが、かみつこうとした心持ちだけでもくんで頂きたい。

三浦一族の最後

鶴 田 湛 泉

絵・加 藤 金 一

三浦氏は関東の大豪族であった。

かつて頼朝が兵を挙げようとした時、北条時政は、頼朝にこう進言したという。平広常、千葉常胤、並に三浦義明の三豪族を招いて味方にする事が出来たなれば、関東を掌中に握ったも同然であると。

殊に和田氏亡んでしまった昨今では、鎌倉幕府にあっても、執権北条氏を除いては三浦の勢力が第一となっていた。

三浦若狭前司泰村の父義村は、幕府の評定衆の筆頭として全勢を極め、北条氏と雖も之に対して手の下しようもない程であった。

時頼が政を執るに及んでも、泰村は評定衆の一人として、最も親遇せられ常に側近にあつて機密に参与し、政事上隔意のない相談がなされていた。いわば三浦氏の威勢の最も華かな頃であった。

この三浦氏に対してようやく肩を並べ得る勢力のあるのは、数多い御家人中でも安達氏のみである。

安達氏は藤九郎盛長以来、甘縄に邸を構えて鎌倉に時めいている豪族である。盛長の子景盛の娘は有名な松下禪尼であつて、泰村の子時氏に嫁し経時、時頼が生れた。それ故、安達氏は時頼の外戚として北条氏を支持し勢力のあつたのは云うまでもない。

その頃、秋田城介景盛は、紀州高野山の三昧院にあって覺地と号して行いすましていたが、日増に隆える三浦の勢力を伝え知ると、内心晏如たり得なかった。

宝治元年四月四日、飄然と鎌倉の甘縄の邸に姿を現わすと、何の用があるのか時頼の亭

をししばしば訪ねて何事か密談しているらしい容子であった。

或る日、景盛は子息義景、孫の九郎泰盛を膝下に呼んで、

「三浦一族の今の威勢は、肩を並べる者が無い程である。殊に彼等一族は、いづれも武勇にすぐれていて万一の場合、到底安達一家の者では太刀打は出来まい。このことは大いに考えてかねがね用意もあるべきに、お前達は一体何をしているのか。一向に備えもせず武道を怠り日々遊樂に耽り、うかつに月日を送っているのは言語道断である。さても愚か者めが」

意味ありげに叱咤し、しきりと鼓舞していた。

景盛が、三浦の勢力を怖れたのも無理はない。泰村はかつての承久の乱には泰時に従って、十八才で宇治川で初陣した程の勇士である。

三浦の勢を頼んでか、泰村の弟光村、並に一族中には、京に帰った前將軍頼経を擁立して北条の威を圧えようと企てていた。けれども泰村は光村等の輕挙を圧え、時頼にたえず畏敬の念を払っていた。

時頼も泰村を深く信じ、泰村の次男駒石丸を養子にと所望し、泰村も之を快諾していた程の親愛のある間柄である。

ところが五月十三日のこと、將軍頼嗣の御台所が僅か十八才で卒し、御台所は時頼の妹であったので喪に服していた時頼は、泰村の亭に遇居していた。

数日経った廿七日のこと、何故か三浦の一族が陸続と泰村の館に集って来た。而るに時頼に敬意を表しに来る者も誰一人なく、又警

固の役に就こうともしない。そののみか集った一族は奥深くかくれて額を集めて何事かヒソヒソと密談しているらしい容子である。夜に入ると、時ならぬ鎧甲冑の音さえ聞えて来るではないか。三浦の館のただならぬ空氣に、時頼は不審の思いにとざされた。

「さては噂の通り泰村奴、逆心を抱いているのか」

と一人うなづき尚も容子をちっと伺っていた。

去る廿一日のこと、鶴ヶ岡宮の鳥井前へ何者かの手によって建てられた立札の前に群れをなした人々が、驚きの目で互にささやき合っていた。それには、三浦泰村に叛逆の心あり、近日のうちに誅罰を加えられるであろうとかかれていたからである。それから種々なる流言が飛んだが、この噂に驚いた三浦の一族は宗家の一大事とばかり甲冑をよろい武器を持って期せずして三浦の館へ詰めかけて来たものであった。

泰村は、自家のこうした取り込んだ容子を時頼に知らすまいとして、しきりと心を配っていたが、易々と隠くしおおすべきものではなかった。

泰村に逆心ありとの風評には、いささかも信を置かず、一笑に伏していた時頼であったが、さては真実かと驚き身の危難を感じてか、太刀持の五郎四郎をつれて倉皇としてひそかに帰館してしまつた。

時頼が俄かに帰館してしまったことを知ると、泰村は仰天して直ぐと時頼を訪ね、何等異図を抱くものでない旨を恐懼して弁明につとめた。

泰村に対して初めて警戒心を抱くに至った時頼は、翌日の夜、近臣の近江四郎左衛門尉氏信を泰村の館に使して、何事かの大計を胸に画いているのではあるまいかと、それとなく泰村の本心を確かめさせようとした。

氏信が来て見ると、一族の面々兵具の手入に忙がしく立ち働き、弓矢、旗棹、鎧櫃等多数並べているではないか。戦備おさおさ怠りない容子に、これは容易なる事態であるまいと思われた。

眉をそびやかしておどろきの面持の氏信に対して泰村は、

「近頃世間が騒々しく、それも皆この泰村一人を目の敵としているような気がしてなりませぬ。これというのも、泰村の兄弟共は皆正五位下の位に昇り、その他の一族も多く官位を帯び、数ヶ国の守護職となり、荘園も数千町に及んでいます。上天の加護も極ったものか、人から嫉妬され讒訴に遭うに至ったは、三浦一家の栄運もここに極ったものと思われまする」

と涙流さんばかり口惜しそうに述べ、時頼公に対して何等隔意のある者ではないことを伝えて貰いたいと懇請につとめたのであった。

「如何にも左様に思われるのは無理もございますまい。貴殿の御心中は時頼公によくお伝え致しますよう。殿に対して御一族の心中に、何の隔意がありませんようぞ」

と氏信は同情の言葉を述べて辞し去ったので、玄関にまで見送った泰村は、重ねて、

「執権どのに、よろしきように申し下されい」

と懇懃に願った。

氏信が帰ると、目撃した三浦邸の動静を細大もらさず報告したのはいうまでもない。

前途の予断ない三浦邸の状況に時頼は、直ぐと重臣と密談を重ね、とりあえず邸の警固を嚴重にすると共に、万一の対応策として近国の御家人に令を発して鎌倉へ召集せしめた。

翌、未明には、早くも近地の御家人が馳せ参じて来た。時刻の経つと共に、武蔵相模伊豆駿何等の武士が陸續と先を争って馳せ参じて来た。時頼の館の四方を固め門を閉ちて非常警戒の態勢をととのえ、遅参した者の入門を拒む程の威勢を示した。更に鎌倉の街の辻々をも嚴重に固めさせた。

事態の急に驚愕した泰村は時頼に使を立て、苦衷のほどを述べさせた。

「過日俄かに御帰館あってから、泰村恐懼の余り寝食を忘れるばかりでございます。近頃世上の噂によりますれば、泰村の身の上は何事かの危害の加わる由、固より泰村には毛頭も心に覚えなき儀にござりまするが、地方の郎党このことをきき伝えて馳せ参って居ります。このために御不審を蒙りまするならば、彼等を直ちに国へ帰らします。若又他に殿を窺わんとする者がありますれば、泰村一党を率いて当りまする、何れなりとも御命令のままに致しまする」

泰村は時頼に苦衷を訴え深謝したけれども、一方主家を案じた彼

の一族郎党は日を追うてますます集って来た。

当時、三浦の邸は西御門にあって幕府の東北僅か数丁の近距離に構えていた。それ故、日増しに幕府方に集って来る軍兵と、三浦勢とが入れ乱れて何れが何れとも分別出来ぬ程の混雑を呈していた。まさに一触々発の危険な状態に陥っていた。

今にも戦いが始りかねないほどの緊迫した事態を案じた時頼は諏訪入道蓮仏と万年馬入道の兩名を泰村の許へ遣って郎党等を鎮めるよう申渡さした。

不覚の事件が起って騒動が大きくなる事を憂えた時頼は、軍兵を鎮撫して両軍の撤退を命じたので、一部の兵は命に応じて国へ引き帰って行った、これで鎌倉の街の暗雲は晴れ去るかに思われた。

三浦の宗家としての泰村は、重大な責任を感じたえず自警もしていたが、時頼の誤解が解け和平の申込を受けたので、初めて安緒の胸をなげ下して其の夜は安らかに睡り、明るい気分で翌朝を迎えたのであった。

「この度の大難も芳出度く御和解になり祝着に存じまする」

夫人は喜びの言葉と共に、朝食の湯漬をすすめた。

「ウム」

晴れやかな笑顔で泰村は夫人の給仕で心よく食事を取ろうとして一口綴ったが、これで、やつと三浦一族を救うことが出来たと思うと、さすがに万感胸に迫って来て喉につきって、思わずむせてしまった。

その時、突然、門外のどよめきが聞えた。

「や、ありや何事ぞ、あのどよめき！ 矢声は」

ただならぬ騒ぎに泰村は顔色を変えたのも無理はない。

「安達勢が押しよせてございまする」

其の場合へ郎党があわただしくかけ入って告げたのであった。

「何つ、理不尽な、兵をさし向けるとは、こうなつては是非もなし」

皆みなじりはさけ憤怒に蒼白な顔となった泰村は、

「者共、ぬかるな」

と立ち上って叫んだ。

三

時頼から平和の使者が三浦へ遣わされたことを聞いた高野入道覚地は、和平が出来たかとおよろこぶような彼ではない。

彼は早朝から、子息秋田城介義景と孫の九郎泰盛を膝下に招きよせていた。いづれも甲冑に身を固めている。

「殿から泰村へ和平の御書が遣わされたそうだが、そうなれば今後、三浦一族の権勢はいよいよ増長し、当家は下積となつて災が目前に来ることは分りきっている。それ故に運を天に任せて三浦の館に押しかけ雌雄を一時に決せねばならぬ。この機会を見逃せば後日に期しても叶うまい。不意を襲つて合戦を仕かけるのだ。早々打ち立てよ」

と景盛が煽り促したからたまらない。

「畏って候」

血気にはやる義景泰盛父子は、雀躍して直ちに一族を率いて甘縄

の館を繰り出したのであった。

一族郎党三百余騎は砂煙を立てながら五石畳の紋の旗押し立て、道を東にとり若宮大路の中下馬橋へ出で、鶴岡社頭の赤橋から社の東側へ回って神護寺門外に出で、ここからどつと関の声を揚げて進み、筋替橋の北に陣を取るや泰村の館へ鎗矢を射込んだ。

「こはそもいかに、昨日やつと和平のことになって心を緩していたのに、……出し抜けたか！」

齒をかみしめながら泰村は急ぎ物具ひしと身につけ、館内の家の子郎党に防がしたのであった。

ここに双方の矢交が初まった。時に宝治元年六月五日の朝まだきである。

鶴岡の境内や、その近辺に屯^{たむろ}していた諸国の軍兵は、矢鳴をきくや、

「すわ、戦の初ったるぞ」

よろこび勇んで我も我もと合戦に加った。

三浦方も幕府方も軍兵共は合戦に憧れていたこととて、待っていたとばかり両陣に加わり、合戦は次第に大きくなって行った。

橋薩摩余一公員などは、泰村の館の近所の納屋にひそみ身を隠して毎日のように一番乗の機会を窺っていたが、戦が初まるや否や、正に妙機到来、功名手柄の晴れ場とばかり、甲冑も着けずに日頃の狩装束のまま駒にまたがり真つ先きに館の門の庇近くまで攻め寄せたのであった。

物見の櫓の上からこの姿を眺めた三浦の郎党小河次郎は、

「俺れ！ 小癪な」

と強弓を引きしぼって大矢をはしと放った。何条たまろう。さしも豪勇な余一公員も頸の骨を射貫かれて、馬からどつとのけぞり落ちてしまった。

元より双方とも猛りきっている軍兵のこととて忽ち激しい乱斗となったが、三浦勢の防戦は仲々手強く、安達勢は多数の死傷者を出してしまった。

この騒動の勃発の知らせを受けた時頼は、北条実時に命じて幕府を守護せしめる一方、

「和平帰服の談合なるに合戦を起すとは、許し難き泰村奴」

と怒り、北条六郎時定を大手の将として五百騎を率いて安達の援軍に赴かしめた。

各地から馳せつけていた御家人も、スワとばかり、各々の家の旗差しなびかせて之に加わって行った。

一方、鎌倉中静かならずときいて諸国の領地から馳せ集っていた三浦方の郎党眷属は、そうはさせまじと、各所に待ちうけて幕府勢に矢の雨を注いだ。

かくて町々、辻々に、武を誇る坂東武士の剛の者同志の激斗が演ぜられ、鎌倉は和田合戦あつて後、再び修羅の巷と化してしまったのであった。

この時、諏訪入道蓮仏（法然上人在世の帰依者）手兵を率いて三浦勢に体当りをなし、当るを幸いに切り倒し難ぎ倒して無双の働きをなしていた。

幕府の評定衆の一人として時めいていた毛利入道西阿の館にも、甲冑武士が相連つて変に備え、いつ何時でも出動出来る態勢にあった。

僧衣に甲冑をよろうた毛利は、巳ノ刻（午前一時）手勢を率いてまさに幕府へ繰り出そうとした。

その時、彼の妻が鎧の袖にひしと縋りついて、

「兄泰村を見捨てて幕府へ赴かれまするか、それでは平素のお言葉と違います。武士は二言ありません。勢につくのは武士ではございませぬ。後の世の笑い草とならぬよう遊ばせ」

と哀訴して必死に止めたのであった。

毛利の妻は泰村の妹で、かつて兄を訪れて万一三浦が立つ場合には、夫を必ず兄の陣へ引き入れますと固い默契が二人の間に交されていたのであった。

毛利は当惑顔であったが、「三浦の浮沈の時」と涙と共に妻に掻き口説かれて、今は是非もなく心を決し、子息兵衛大夫光広、次郎藏人入道、吉祥丸等一族を率いて泰村の陣へ馳けつけて行った。

こんな事件が起ると、一族縁者はすべてその余波を受け、いづれ成敗の手が免れないのが当時の習であったので、是非は別として勢い一族一致団結して運命を共にせねばならなかった。

四

戦場から駆け戻って来た時頼の近侍、万年馬ノ入道は、慌しく幕府の南庭に騎馬のまま乗り入れると、

「殿、一大事にございます。只今、毛利入道どのが敵泰村の陣に



加わってございます」と大声で呼んだ。

時頼は、この知らせにもさして驚く容子もなく、

「いかさま天道に背く輩は、たとい鉄城に立てこもるとも更に頼になるものではない。見て居ろ、泰村もろ共滅亡することは必定」と自信満々と答えた。

が、時めいていた毛利が三浦方に附いたという噂は、幕府の陣営に非常な恐慌を捲き起したのは争えなかった。

時が移ると共に騒ぎは一層大きくなり、両陣営に加担する者も刻一刻その数を増して来た。そのため戦はますます激しくなり、関の声は天地に響き、敵味方のけぢめもなく乱れ戦い、騎虎の勢で打ち合い攻め戦い鎌倉中を血で染めたのであった。

幕府軍は新手新手と入れ替え差し替え攻め立てたので次第に包囲陣を締め終に三浦の館へと肉迫して来た。

しかし三浦の反撃は、一層するどくなってくる。

味方の思わぬ損害に業を煮やした大手の大将六郎時定は、

「こうしては兵を多く損ずるばかりで利は少い、火を放って焼打に致せ」と下知した。

「おお」

と声に応じて伊豆の住人、怪又八義明は身を挺して進み泰村の館の南隣の民家にましろのようにかけ昇った。そうはさせじと三浦の兵も、その後を追って登って行く。屋上の激斗となり、義成は当るを幸に薙ぎ伏せた。二三の武士は、「あっ」と絶叫をあげて屋根から地上へころがり落ちる。ひるむすきに彼は火矢を次ぎ次ぎに館へ

射込んだ。

折柄、北の強風、南に変わって吹きまわっていた。火は強風に吹き煽られ、焰は四方に飛び散って、忽ち立ち並んだ三浦の館に燃え移り拡がって行った。黒煙は天に巻き上り、火焰は妖魔のようにメラメラと地上を這い廻る。火の紛は雨と降ってくる。

さすがの三浦の勇者も、火に取り巻かれ煙にむせんで攻戦力を失い防ぎ戦うべき策もない。

幕府勢はこの機会を失すなど、一勢射撃を初める。三浦勢は所きらわず降って来る矢を浴び朱に染ってバタバタと各所で折り重って倒れ出した。

形勢一度に不利となり、押しよせてくる目に余る敵に、平判官義有は、

「とても通れ得ぬことなれば、ここにて焼死するよりは法華堂に引き退き、故右大将頼朝公の御影の前にて自決仕って前代の御恩を報じ奉ろう」と泰村にすすめた。

所詮そうするほか道がないと覚悟定めた泰村は一族郎党に下知して、風下の敵の手薄い北の方を打ち破り血路を開いて法華堂へと向った。

この時、泰村の弟光村は、八十騎の手兵を率いて永福寺の総門の内に陣を張って奮戦していたが、泰村等が館を捨てて法華堂に立て籠ったとの報せをきくと、急いで使を馳せらせ、

「こちらは要害の地のこと故、討手を迎えるには屈強の地でござい

ます。早くこちらへお越しあれ」

と攻守共に便であるから来り会せよと促した。

ところが泰村は、

「たとえ要害の地であろうとも、天下の兵を受けては遁れる道はあ
るまい。同じ死するならば右大将の御影のお前こそ望ましい。和殿
も早々来り会せられよ」

との答えであつた。

光村は、折り返し使を遣つて来会を求めたが、泰村は更に承諾し
ない。使を再三出したが、泰村は嚴としてきき入れないのみか、

「早々、法華堂へ来つて一族と最後を共にせよ」

と命じて来たのであつた。

兄の命を拒むこともならず光村は不本意ながらも永福寺を出で、
法華堂に移ろうとした。

「よき敵、ござんなれ」

とばかり、甲斐前司泰秀以下、光村を目がけて群り来つて道を塞
いだ。ここに激斗が交えられ、双方とも多く疵を蒙つた。

光村は大半の部下を失つたが、尚もしつこく追迫る敵を不死身
の夜叉のように荒れ狂つて薙ぎ切り斬きまくり、漸く敵中を突破し
て法華堂にたどりついた時には、草摺は破れ、顔には矢傷の血が吹
き流れ、さんばら髪になつて鬼神のような姿となつていた。

「おお、光村か」

泰村も弟の姿に、しばし啞然として苦戦のほどを思いやつた。

五

法華堂の堂内では、毛利入道を始め、泰村、光村、家村、資村の
兄弟、其の他、大隅前司重信、美作前司時綱、甲斐前司実章、岡左
衛門尉政泰以下一族二百七十六人、頼朝の絵像の前に肅然と居並ん
でいた。

今は抛るべき陣地もなく刻一刻三浦の最後の迫つて来たことを感
じている彼等は、いづれも同族一緒に死につく覚悟である。而も余
祐紳々たる彼等であつた。

彼等は過去の日を想い浮べて互に語り合い、さまざま思い出に最
後の名残を惜んだ。誰の顔にも悲愁の色は濃くただよっているが、
死を前にして悠々と談笑しつづけていた。何しろ二百名以上も集つ
ていることとて、堂内の喧騒は一方ではなかったという。

ややあつて一座を見廻した毛利は、おもむろに口を開いて、
「皆の衆、せめて今生の名残りに、浄土法事讃の仏事を営んで後生
を祈ろではござらぬか」

とすすめた。

「それがよろしかろう」

言下に賛意を表したのは泰村である。

「されば能州殿、調声されよ」

「心得申した」

頼朝の御影の前にみ灯をあげ、香をたき光村は居づまいを正して
浄土法事讃を天性の美声で唱え初めた。

彼の朗々たる音声に、あたりは肅とした。一蓮托生の因をよろこ
んで、毛利初め一族はそれに和し唱えた。

何しろ父義村は、伊豆の走湯山の念仏僧浄遍房に深く帰依し、彼から弥陀の本願念仏の尊い理をきき、日夜念仏を唱えていたほどの念仏行者であった。かつて安貞三年三月廿一日の彼岸の中日に、鎌倉三崎の海岸に十余艘の船を浮べ浄遍房の指導によって弥陀来迎の莊嚴な粧を催した程で、この父義村の感化によって一族いづれも念仏信者であった。

殊に毛利入道西阿は、法然上人に親しく念仏の教えを受けた念仏行者であった。

すぐる建永二年二月のこと、上人に念仏禁止の嚴命と土佐国へ流罪という宣旨が下った時、小松谷の庵室へは日頃教えを受けていた公家武士が七十五才の御老体の上人の身を案じて多数集っていた時のことである。

今度の遠流を朝恩とまでよろこばれていた上人は、一人の弟子の問に應じて尚も法を説いていたのであった。

その時、たまたま大番のため京にあった毛利も庵室に馳せつけて来たが、この場の容子を眺めて驚き言葉もあららに、

「今の場合、かかることがあっては世間への聞えもございます。法を説かれることはお止め下さい。……各々方もお返事してはなりませんぬ」

上人の態度を不謹慎なことと思つた彼は、真心こめていさめ止めようとした。

上人は日頃の温顔を一瞬こわめられ、

「たとえ我れ死刑に処せられようとも、念仏の法を説かず居らよ

うぞ」

法を弘めるためには身命を惜しまれぬ毅然たる言葉に、我が言葉に耻ぢ、しばし感涙にむせていた。

堂内には、弥陀如来を礼讃する声が颯々として籠り初めた。

その時、堂外には、ひゅんひゅんと矢音がきこえ、はげしい攻め鼓と攻め鉦が鳴り響き、武者声がとどろき渡っていた。早くも幕府の軍兵が、寺門に剎到して来たのであった。

「今は最後の御奉公なるぞ、いづれもおくれをとるな」

と堂を護っていた三浦の郎党、白川七郎兄弟、岡本次郎、埴生小太郎等の率いる数百の軍兵、ここを先途と黒山のようになつて道を塞ぎ、必死に反撃を試みた。

堂内では、莊嚴な法事讃の勤行^{かつとろ}が行われ、恍惚としてあたかも一つの世界にとけ込んで行くようであつた。何か新しい生命が、そこから湧いて来るようであつた。そこは、もはやこの世の葛藤を忘れ、怨憎を越えた清らかな世界でさえあつた。浄土へのゆるがぬ信仰を抱いていた一族は、いづれも久遠の命に生きる思いであつたろう。

自若として法事讃の長い勤行が終ると、光村は言葉も激しく、

「思えば返す返す口惜しいこととござる。先きに摂政道家公の密旨に従うて、前將軍頼経公を再び將軍に推すために事を挙げていたならば、三浦一族は幕府に盤据することも出来て居たらうに、あたらしい機会を逃がしてしまった。兄上に決断がなかったので、終に一族滅

亡して、天下の笑い草となったわい。今はいかに悔とも及ぶまい」
無念さの余り、全身そそげ立った形相である。

光村は、美人の聞え高かった夫人と、出陣の際に互に小袖を取り替えて着ていた程の情勢家であった。

悲憤の涙をたばちらして、

「死しても、この面を見せまいぞ」

と双の目を研いでいう。

「いでや」

と寒々とした刀を抜くと、人々があっと驚く瞬間に、自ら顔の皮をそぎむいてしまった。血がさっとはね返って、飛沫が頼朝の絵像を朱に汚したという。

咒いに似た叫びをあげ、

「まだわしの顔であることが分るか」

一目と見られぬ怪物のような顔を一族の前へぬっとつき出してきいた。

それには誰も答えず、全身の毛孔もよだつ思いで、正視するにたえないで顔をそむけてしまった。

赤肌になった顔から血をほとほと流して、

「アハハ……ハ、……こんな亡骸をさらすのも無念、一層のこと、

この御堂を焼いてしまったら、隠すに屈強だろうに」

と嘲笑していた。

夫人のなまめかしい小袖を身に着ているだけ一層光村の凄愴な鬼影に、堂内は不気味な鬼気がただよっていた。

光村にひきかえ泰村は、言葉静かに、

「わが三浦は、大介義明この方四代に渡って幕府に輔佐の功を樹て、いささかも邪心を狭まなかった。而るに今讒に遭うてこの災厄に遭うのは恨めしい限りであるが、これも天命であろう。我が父義村は、永久の乱の折といい、又和田の騒動の時といい、多くの人々を死罪に処したから、或はその酬いが吾等の身に來たのかも知れぬ。わしはあながち北条殿を恨みとは思っていないぬ……」

泰村は、三浦の没落を悔うる色とはなかった。がさすがに感慨無量になって來たのか、涙にむせんで後の言葉はききとれない。

数刻の間も法華堂を頑強に護っていた三浦の郎党も、幕府軍の猛攻に屍の山を積み、終に弓折れ矢つきで生き残った者として傷かぬものはなかった。

今はこれまでもなりと、泰村以下一族二百七十六人、郎党二百二十余人、堂内に於て、

「さらば」

「さらば」

と淡々として帰するが如く、同時に腹を切り悉く果ててしまったここに康平六年、桓武平氏の末流三浦為通が三浦半島の衣笠に居城しその地名を姓として起って以来、さしも累代武名響いていた三浦も、法華堂を血に染めて一族悉く悲壮な最後と遂げてしまったのであった。

三浦滅亡以後、北条氏に肩を並べる豪族は無きに至ったのはいうまでもない。



眞理の花たば

—— 若き女性への仏教入門（七） ——

佐 藤 良 智

「大いなる力」

わたしのすわっている窓辺に、葉鵝頭が初秋の光をうけて、紅に燃えている。なんという逞しさだろう。

もえている

もえている

大いなるちから。

みなぎるちから。

この力は宇宙にみなぎっているのだ。物をとうし、ところを通じて、いつでも、どこでもみなぎっているのだ。

かぎりないいのち（無量寿）となって。

かぎりないひかり（無量光）となって。

青い色は、青い光を放ち、黄色い色は黄色い光を放ち、

柳は緑に

花は紅いに。

いのち いのち

ひかり ひかり

なんというたくましい力であろう。

この力こそ生命の根源なのである。

この力こそ光明の源泉なのである。

ぶつ、世尊のみ教えは、このおんちからに、われわれが、そだてられ、はぐくまれていることを知らせ給うために説かれたのである。この、内にたたえられたおんちからを説

き示すために世尊は世に出で給うたのである。

真如。

なにか幽玄なものを感じさせることばである。世には、言葉で表現できるものと、できないものがある。いまは、ことばで言いあらわせないものを、強いて表現しようとして言われたのが、この真如である。幽玄の香りがするのは当然である。

一輪のバラの花の深奥の美をとらえることはむづかしい。それは、もちろん写真によっては表現できない。芸術的に表わす様式である。或は、具象の、あるいは、抽象の絵画によってその美は把えられるか。詩によってとらえられるか。音楽によって把えることができるか。その香りにも似たもの、または、その一部の美わしさの如きものを把えることができるかも知れない。しかし、極まれる、さながらの美のすがたは、とうてい、つかみとることはむづかしい。人間の始まって以来、無数の芸術家は、色々の形式をかりて、美の殿堂の奥にせまろうとして、文字通り、骨をけづり、身をうち砕いてきた。今も、たゆみなくその努力は続けられている。しかし、今もってその全貌は表現しき

れはしない。

あだかも、そのように、世尊は、世界の第一義の眞実を體現し、示し給うた。その身をもって示し給うた。その示し給うた眞実を世尊にあこがれる人達は知ろうとつとめた。おびただしい三つの蔵（經藏・律藏・論藏）におさめられた經典がそのあとである。その經典はなぜ幾千巻というよるな尨大なものになっているのか。他の宗教にあっては唯一書にすぎないものがあるのに、このように数多くあることを不審に思われる方も多かるう。しかし、その理由は、以上のようなことに由来するのである。かず限らない文學書が、人間の眞実を表現しようとして存在し、今尚、日夜に作られているように、多くの仏典は、世尊の説き給うた、世にも尊い、崇高な眞実にせまろうと、經典というかたちをかりて、幾世紀の星霜を經過して迫りに迫った、言わば、戦歴のあとなのである。その一字一句に血が滲み、涙がもられているのである。それによって、多くの人々が救われ、はげまされた。そして今も尚、救いの力となって生きている。しかも尚、それらは、眞実を指さす指にすぎない。

唯一つの眞実を現わそうと、真如・眞実・實際・如々・法性・仏性・如来・等々のことばを重ねる。ことば、更に、

ことば。その踊りによって却って眞実が見失われることを恐れて、「文字を立てない」という主張さえでてきた。言葉は眞実を言い現わさないというのである。あの多くの経巻を否定するのである。文字を否定し、ことばを否定し、「沈黙」のうちに眞実を把えようとするのである。「黙」を通じて、眞実に迫るのである。眞如の深さがここにあると同時に、眞如即ち眞実の把えがたさがここにある。

眞実に迫ろうと、仏像という形式がとられる。造形美術を通じて「眞」に達するようにするころみは早くから行われた。その最も早いものにはぶつ世尊のおんすがたはない。唯、その坐と背景の菩提樹だけを示して、如来の眞を現わそうとしている。かたちをもっては眞実のシンボルである如来のすがたをあらわし得ないというのである。あらゆるかたちの仏像が、かたちを通じて眞実なものに迫ろうとしたものであることがこれによってもわかる。

宗教はわれわれの直接な生命にかかわるものである。言わば、いのちがけのものである。生命の眞実のなかに融け入るか、それとも、ただ、夢のようにいたづらに、いのちに流されてしまうか。そのわかれ目を決めてくれるのが宗教である。

生命の眞実というが、これがことばに終ってしまつてはなんにもならない。温かい血のかよった、香うが如き事実とならなければ、本当ではない。眞如といい、眞実といい、如来といい、なにか特別の、魂しいとでも言うような、かたまりでもあるように思うことは誤りである。

これを人間にかぎって言えば、人びとのくらしのなかに、日々のくらしのなかに、一枚となつて滲みでてくるものでなければならぬ。

生れたり、

死んだり、

よろこんだり、

悲しんだり、

希望にもえたり、

落胆したり、

それが人生というもの。その波のなかに、珠玉のように光るもの。それら一切をつつみいたわり、はぐくみ、そだてるもの。それが宗教の慈しみである。

生命の眞実は、つめたいものではない。いつも育ぐくもうと、つつもうと意志しているのである。救いとろうと願ひ給うのである。眞実の生命の意志は本願とも名づけられている。み仏のいのちともよばれている。その慈しみのみ手

は、現にここにあらわれているのである。現に成しとげられているのである。私共は、ただちに、おんいのちにとびこめばいいのである。

知性をみがいて、みがき終ってそれから、というのではない。

こころを清め終ってそれから、というのではない。

いのちのことは、一刻も、一時も、待ってくださいというわけにはいかない。流れに流れている。わたくしどもの知性は、みがききるといふわけにはゆかない。心を清めきることはむつかしい。

まづはこのままで、永遠のみ命と、かぎりないみひかりとを信じて、今、ただちにとびこむことです。身も心も投げこむことです。おんいのちそのものになりきることで

なむ仏

燃える鶏頭はおんいのちのままにもえている。

いのちのがわに立ってもえることです。

御いのちのこちらがわにたつてなやむことでなく、真如の、真実の生命のうかがわにとびこんで、そこで燃えるこ

とです。

青春のいのちを、永遠なるもののなかで艶なる牡丹のよう

に燃えしめ給え君よ。
そこには大いなるみ力があなたをささえる。大いなるみ力に育ぐまれて知性はかがやく。大いなるみ力にささえられて、あなたの愛なる慈悲心は湧くかのようにあふれ満つるであらう。

豊かな香るようないのちの、その日、その日。

それが信あるもののいのち。

み仏にきえしたてまつる

珠玉の、その日。その日。

尊き哉 人生。

尊き哉 みいのち。

尊き哉 みひかり。

尊き哉 み仏。

(大正大学教授)

×

×

×

×

会 員 だ よ り

右の通り送金いたします。御查收下さい。早く送りたいと思ひながらついつい遅くなり御催促で恐縮でしたが送金の機会が出来まして有難うございました。 合掌

和歌山 伊藤 慎隆

前略 御免下され度

毎度「浄土」御送附下さいまして有難く御礼申し上げます。

御通知下さいました三十四年度七月より十二月分迄送金致しましたから宜敷く御願いたします。 会掌

京都 金品 寺

お手紙有難うございました。貴会発行の雑誌「浄土」拝読してあります拙寺はある機を見て時宗に戻りましたので、その後「浄土」を中止していたのですが、誠におしいことと深く感じています。法然上人の御事は時宗に存在しても大敬服しています。私の続く限りいつまでもとり寄せたいと思います。唯、残念な事は読者を増加したいが

出来ないことをお察し下さい。本日は土曜日な故近く振替で送付致します。

茨城 峯 崎

いつもお世話様になっております。扱て小生の誌代今日まで甚だ横着をはり御迷惑をお掛けして参りました。何卒悪しからずお許し下さい。過日頂きました精算御通知の通り御送金申し上げます。

広く一般にも呼びかけ漸次支部結成へと進めて参り度いと思ひます。今後益々御発展をお祈り致します。

山梨 松田 匡弘

新規会員紹介

東京	青木幸太郎様
静岡	西光寺
山形	正覚寺
秋田	津村諦堂
神奈川	西村喜代子
東京	原田富貴子
山梨	曾根教雄

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一カ年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年九月廿五日 印刷

昭和三十四年十月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

発行所 法然上人顕仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二

振替東京八二二八七番

The testimonial
from the governor of
Kyoto
awarded to
U. NAKAMURA,
the director



The letter of
gratitude from
the Mayor of
kyoto sent to
NAKAMURA FUNGUS
CHEM. LAB.

中村医学

全治に実力作用する特
許フザリウムの特効
から病原の淘汰作用！
発生シワルツマン因子
の滲透から再生作用！

医学ニュース
中村医学の学理を
世界に発表さる

大阪医大の名誉
教授谷村博士は
兼て中村菌液の
実験を実施され
その卓効力を刷
新論文に英訳さ
れて全世界の医
学界に報告の光
榮に浴しました

中村医学必携
実験写真入ア
ト縮本贈呈
◎御申込下さい！

中村医学にて難病の治る真理

中村医学の基礎



恐るべき耐性菌を崩壊淘汰する



滲透するバクテリア層を完全淘汰する



例 告 報 話 実 験 実

- (一) 高血圧で脳溢血の危険状態を好転恢復されている報告。
- (二) 心臓病特に危険な狭心症の危篤を好転恢復している報告。
- (三) 癌腫の進行を阻止し癌細胞を溶解淘汰して食道癌、胃癌、舌癌を恢復している報告。
- (四) 肺結核の治療中に耐性悪化した薬毒の副作用を好転して恢復されている報告。
- (五) 肝臓を腫らし胆嚢を痛めた危篤の入院患者が好転恢復した報告
- (六) 胃潰瘍で食事出来ず手術を要する危篤患者が好転恢復した報告。
- (七) 腎臓、糖尿病で入院すれど全治せぬ状態から好転全快の報告。
- (八) 関節リュウマチ並に神経痛で入院しても全治不能の難症が好転して楽に歩行できる報告。
- (九) 喘息で注射するほど発作してくる病原と副作用の被害を解毒好転して100%全治した報告。

中村菌化学研究所

京都市東山区鞘町五条南
電話祇園(6)2364・0522番

Nakamura Fungus Chemical Lab.
Sayamachi Gojo, Higashiyama-ku,
Kyoto, Japan

御たを
をつを
なを
告名
広に
本覧
記入

東京外国語大学教授 増谷文雄 著

親鸞

B6版 三三四頁
定価 日本書房刊

——その生涯と思想——

浄土真宗の立場を離れて新しい見地からの親鸞観、蓮如を通して語られた親鸞でなく、教団の枠をはるかに越えて、親鸞の腹藏のない言表にふれながら、その人となりと思いをえがいている。

著者はいう、親鸞の本質は、浄土真宗の樹立者とか、悪人正機思想の提唱者とか、そのような役割を異にして、もつと、宗教にとつて根本的な問題について、すぐれた種をまき、すぐれた範例をのこしたところにある。

目次

第一部 その生涯

吉水における親鸞

選択本願念仏集と親鸞

念仏弾圧のあらし吹きまくる

親鸞の教化のしかたの一例

等

第二部 その思想

一つの新しい立場から見る

等

法然の本質は「智慧」にあった

選択ということと最勝ということ

悪人正機のこと、

法然の場合、親鸞の場合念仏と信心とは一枚であること

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十四年九月二十五日印刷 昭和三十四年十月一日発行

浄土

第二十五卷

第十号

定価金五拾円(送料)

宗祖七百五十年御忌記念製作

カラー・スライド

「円光大師二十五霊場」上・下二巻

定価上・下二巻 金一五〇〇円
荷造送料 金九〇円

御注文の節は前金にてお願い致します

東京都港区芝公園十九号地浄土宗務所内

浄土宗教化団中央本部

申込先

振替東京六一九三九番
電話芝(43)一三八二

惻々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子

文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳

宗教の信仰を遺文にみる 佐藤 賢順

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円・十八円

二十部以上一五分引

五十部以上一割引

百部以上一割引

東京都品川区上大崎一の七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替 東京 八二一八七番